

平成27年9月1日発行 巻数/第70巻第9号(毎月1日発行) 印刷21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

September 2015

9 月号



主宰の句

安立公彦

ひとすぢの滝を遠見の千曲川

敦忌と日記一行梅雨さむし

蛇を見し夜や丹念に口漱ぐ

縊り合はぬ一夜の夢や明易し

詩書を手に車中午睡の佐久郡





安住敦の句

墓の辺に鳴きゐし蟬か夜は宿に

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

今年は木下夕爾没後五十年、享年が五十歳なれば生誕百年である。安住先生の懇慫で万太郎に師事し、詩情豊かな句が春燈誌上を賑わした。掲句には「木下夕爾十年忌、福山にて」とあり墓参後宿で故人を偲んでの作である。濃やかな師弟の情思が滲む。先生は数多く夕爾忌を詠み、季語として定着したが、彼の天折は大きな痛手だった。〈傘雨忌もて夏来夕爾忌もて秋来 敦

柴崎 甲武信

初蚊落ちてわが水割に溺るるよ

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

医師から睡眠薬は身体に良くないので、ウイスキーに切り替える様忠告された作者、ウイスキーの水割を作りいざ飲むとすると、弱々しい蚊が一匹グラスの中に落ちて来た。それを見て芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』の中に出て来る御釈迦様のように地獄ならぬ水割からマドラーで助け上げたに違いない。助けられた蚊は礼を言ったのであろうか、一編の小説の世界へ誘われた。

久米 憲子

燈下集



○ 滝沢幸助

兵はたち敗戦玉音放送今も胸に
敗戦日を終戦と美化しいつはりし
原爆忌の恨み生涯地のはてまで
卒寿過ぎてしみじみ母を思ふ夏
敗戦日この方忠孝両全以て生きし

○ 中村嵐楓子

湧水の湧のゆたかに梅雨入かな
斑猫やこの先案内は要らず
つと現れて梅雨の足場の漢かな
紫陽花やひとにはひとつ物語
風鈴や力士出払ふ相撲部屋

○ 鷹崎由未子

禅寺に色ゆるされて額の花
警策の絶妙の間や日の盛
卯の花腐し句会の席のひとつあき(憚)
かりそめの世なれば蛇は衣をぬぐ
十薬の人欺かぬ白さかな

○ 綱徳女

夭逝の君の墓域や罌粟咲かす
直言は容れられ難し梅雨の蝶
何も彼も手につかぬ日や浮いて来い
相槌を打つ間はづしぬところ天
世の端の女世帯や灯の涼し

○ 小張 昭一

戦陣訓に育ちて生きて夏瘦せて

鉄砲百合沖向く沖繩慰霊の日

尻高く頭を低く草刈女

灸花お薬手帳満杯に

燕の子加賀の茶屋街ひがしにし

○ 鈴木 鳳来

敦忌や師系大事と樗咲く

灯台に波打ち返す青岬

幽玄の大竹藪や安居寺

紫陽花やむかしは村に子沢山

あとさきに夫婦の新内流しかな

○ 松本 峰春

夏の星道標^{しるべ}どほりに西へと急ぐ(樟・西尾狂蟻大元)

漁継ぐ子もさうでなき子も穴子釣る

いつ落ちし落し文とは言挙げせず

落し文縦書ばかりかと思ふ

落し文これは恋文かも知れず

○ 木村 傘休

台北の夜店に買ひし小筆かな

台北の夜店に匂ふ蛇籠かな

また空家ふゆる卯の花腐しかな

家長てふ言葉失せたり冷奴

病棟の深きしじまや時鳥

○ 加藤 良子

薬嫌ひの友の音沙汰朝曇

古茶新茶葉は白湯がよかりけり

別れ難き本もありけり半夏雨

父祖の古書蔵書印さけ紙魚の跡

史料館へ和綴の古書や雲母虫

○ 鈴木 静恵

椰子の実の流離の岬や夏の潮

夏木立武甲の傷を隠したり

三行半か駆込寺の落し文

御師の宿夜干の梅の香りけり

合点首の仕掛玩具や夜店の灯

当月集

安立 公彦選



○ 吉村さよ子

身を乗り出す小雨の朝の燕の子

泳ぐ金魚横目に魚下ろしをり

「帰りたい」ところはあらず姫女苑

長居する蝶あらはるる合歓の花

小蛙の跳ねてちりぢり青田かな

○ 後藤眞由美

黎明のいろに刷かるる四葩かな

甘藍のひかり巻き込み育ちゆく

クールビズむかし六月無礼かな

ででむしの角先覗く木の葉かげ

天金の蒼む聖書や夏の月

○ 川崎真樹子

宇宙葬望む夫や新茶汲む

茴香の花のあはひに風生まれ

盛塩のうすむらさきや夏灯

半夏生咲き夜通しの雨となり

退職の夫の寝癖や洪団扇

空の縹四葩の藍の水鏡

日の光余りてさびし麦の秋

川面吹く風になりたき螢火や

老鶯や昼ひとしきり鳴いて去ぬ

青梅雨の写経に過ごすたたずまひ

○ 赤岡茂子

新緑の夢の膨らむ雑木山

みちのくの起点千住の道をしべ

紫陽花や千住宿場の昨日今日

新樹光散らすグラスやチェコ遠し

群がれる花十葉の暮るるかな

春燈の句

安立 公彦選

紫陽花や人はその日の色を着て

神奈川 新海 英二

万緑や目に触るるもの皆いのち

どこに身を置いても梅雨の湿りかな
衣紋竹母の形見の軽羅干す
主治医より自信持てとや薔薇薫る

青葉木菟菩提寺裏の昼の闇

衣更へて心身共に軽きかな

埼玉 長谷 仁子

恙なしとこころ選ばぬ三尺寝

白鷺の二羽見え隠れ青田道

神奈川 溝越 教子

あやめ咲く潮来花嫁祝ひ唄

吾が愛でし紫紺の花や夏の朝
遠郭公施設の夫を想ふ日や

緑陰や亀の眼の潤みがち

鳩杖の箱書やさし梅雨晴間（板倉波山記夢館）
千葉 大湊 栄子

沙羅咲くや坂東太郎静もれる

夕蛩草に沈みぬ敦の忌

茨城 石橋 邦子

文月や式部の日記ひろひ読む

機織りの音も遠のく夏の夕

筑波嶺の風に吹かるるひつじ草

この惑星の二人のくらし新茶汲む
夏至の日の約束三つこなしけり

神奈川 河本由紀子

風入るる父の戦地の葉書かな

慰まず色紙入替ふ梅雨ごもり

東京 那須 禮子

ポプリの香部屋に馴染みて明易し

秒読みに追はるる若き棋士の汗
白黒の仏映画恋ふソーダ水



余言

安立公彦

なに言はれやうとどくだみ白く咲き 三上 程子

どくだみ（蕺菜、十薬）ほど場所を選ばず生える草花もめずらしい。どくだみの意は毒を矯めるといふ謂れから来ているとのこと。消炎、利尿剤として用いられ、葉は腫物に効くという。しかしあの思臭と濃緑色の葉はまさに「なに言はれやうと」である。そうは言っても、十薬の白い十字の花は、ただひたすらに咲いているという健気さを持っている。作者もそういう十薬を鼻屑にしているのだろう。「白く咲き」にその労りの思いが確かに出ている。

このごろにしてステテコよろしきよ 近藤 牧男

こういう句がある。へステテコで隣へ寄るも佃島 子舟下町の日常が伺える。上方では夏の簡易なつろぎだったという。しかし最近はこの季語を省略した歳時記もある。この句、「このごろにして」に注目した。作者の住まい

は千住。「奥の細道」旅立ちの地であり、東京の下町である。子舟の句に見るような日常が、しずかにそしてくつろぎ感を以て復活したのなら喜ばしい。何といつてもステテコは室内着としてはまさに「よろしきよ」である。

俳諧の縁涼しく交はれり

大室重美子

高浜虚子の『虚子俳話』という本に、こういう一章がある。「お寒うございます。お暑うございます。日常の存間が即ち俳句である」「目見る処、耳聞く処、心感する処、そこに俳句がある」。又別の章でこうも言っている。「交りは淡く、信は貫く」。まさに箴言だ。

掲出の句を見て、この『虚子俳話』を思い出した。まさに「俳諧の縁」は「涼しく交はれり」である。

島唄に酒酌み交す沖繩忌

白杵 游児

「沖繩忌」は、昭和二十年六月二十三日。歳時記には掲載されていない書もあるが、この日、沖繩本島とその周辺での日米両軍の激戦の末日本軍は全滅、住民十数万人が死亡という今次大戦で、原爆禍に次ぐ惨事となった。

作者はいま、その激戦の地沖繩で、島唄を聴き、酒を酌み交わしている。しかし思いは七十年前に遡る。未曾有と

も言える惨事と、今こうして鳥唄を聴く平和と、作者の胸中を過る思いは複雑だ。一句が平和な表現故、ことに「沖繩忌」が強く響いてくるのである。

玻璃越しの守宮の腹をなげにけり 林 紀夫

「やもり」は、守宮、家守などの名のある通り、人家に栖み、夜手洗い所の窓にぴたりと吸いついているのを見るのなど、気味悪いものだ。しかし物の本には、害虫をとる有益な小動物とある。「家守」の由来である。

この句、「なげにけり」が、守宮への気持をよく現わしている。それも、「玻璃越し」あつてのこと。久保田先生に〈壁にいま夜の魔ひそめるやもりかな〉の句がある。昭和二十六年の作。「カルカッタにて」の前書がついている。

夏帽子華ある余生目ざしけり 宮崎 裕子

同時発表の句に、へ息とめてカサブランカを抱きけり、〈認知症に罪はなけれど遠花火〉の句がある。字体もすっかりとして、句の内容にも乱れや衰えは些かも感じられない。掲出句、「華ある余生」が、「夏帽子」の活気とよく照応していて、年齢は未詳だが、文字通り華ある余生を歩む或る程度の年齢の女性と思いつながら拝見していた。

その宮崎さんの訃報が届いたのは七月十三日だった。昨日逝去されたと記してある。全く突然のことだった。「認

知症」の句には、世相への問題提起がある。同人のご逝去は今年に入つて三人目。謹んでお悔み申し上げます。

夏目坂の老マドンナや白日傘 長谷川歌子

この句を見ながら、「夏目坂」という名にかすかな記憶があることを思い出した。それが漱石の『硝子戸の中』と気付くまで暫くかかった。漱石がこの小品を書いたのは、大正四年、没年の一年前である。「私の旧宅は今私の住んでいる所から四五町奥の…」とあり、「私の家の定紋が井桁に菊なので、夫にちなんだ菊に井戸を使って、喜久井町とした」、また夏目坂は、漱石の父が名付けたと書く。

掲句、「老マドンナ」がいい。更に「白日傘」の姿が如何にも粹である。漱石の作中に遊ぶ思いのする一句だ。

ひたすらに点滴見つむ明易し 小島 昭夫

このところ燈下集作家に疾病の人が増えている。作者も先般胃の手術をされた。七月の本部句会は無理だろうと思つてしたが、元気な姿を見て安堵した。

掲出句、胃の手術は長時間に及んだそうだが、病因の早期発見が幸いした。しかし病床の時間は長い。「ひたすらに点滴見つむ」はみごとに臥床描写だ。緊張感と無事手術の終わった安堵の思いが、「明易し」と共に良く出ている。